

熊野神社古墳の物語

桶川市歴史民俗資料館 企画展示



桶川市は原始古代の遺跡の宝庫として知られています。

とくに、川田谷地区の熊野神社古墳は、埼玉古墳群より約1世紀前に築かれ、県内における古墳時代の始まりを物語る古墳として注目されてきました。

今年は、国指定重要文化財「熊野神社古墳出土品」が発見されてから、90年の節目にあたります。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡から発見された資料とともに、熊野神社古墳が物語る古代の歴史を訪ねてみましょう。

〔展示期間〕 平成30年3月18日（日）～5月6日（日）

八幡耕地遺跡の壺から始まる物語

稲作を行う人々の遺跡が桶川の地に出現するのは、紀元2世紀にあたる弥生時代後期のことである。

この時代、東海地方から南関東の人々は、赤く彩られた美しい壺形土器をもって、東京湾岸から荒川、すなわち旧入間川にそって生活の場を北へと広げていった。

八幡耕地遺跡から発見された壺形土器を始めとする弥生時代の土器は、当時の歴史を私たちに伝えてくれる。

八幡耕地遺跡は、西に広い荒川の氾濫原を見下ろす台地上にあり、遠くには富士山や大岳が良く見える。また、台地の北東には狭い谷が入り込んでおり、昭和55年（1980）に行われた発掘調査のころには谷水田であった。

昭和55年の第1次発掘調査で発見された弥生時代の住居跡は1軒のみであり、その後に行われた発掘調査においては、この時代の住居跡が発見されていないことから、弥生時代の集落の規模は小規模なものであったと推測できる。



八幡耕地遺跡発掘調査 昭和55年

八幡耕地遺跡の土器

昭和55年に行われた八幡耕地遺跡第1次発掘調査において、1軒の住居跡から発見された弥生時代の土器は29個体であり、その内訳は、貯蔵に適した壺形土器、神への供え物を盛った高坏形土器、竪穴住居の床に設えられた炉での煮炊きに用いた台付甕など、この土地での稲作を始めた人々の暮らしを物語っている。中でも壺形土器は、17個と全体の65%を占め、最大のものは全高63cmに達する。

稲作を行う暮らしにおいては、貯えることに大きな価値がおかれていたと理解される。壺形土器には赤く彩られた土器がある。貯えられた籾は、翌年の種籾となり、豊かさを再生産していく。まさに、弥生時代の人々にとって、壺に神が宿ると考えても不思議はない。

壺形土器（展示資料4）は、「弥生町式土器」と考古学上では分類され、南関東では東海地方東部との交流をもちながら弥生町式土器の地域圏が形成されている。

一方で、口縁部に段を重ね、粗い縄文を帯状に施した壺形土器（展示資料6）がある。これは、旧入間川水系にあたる比企地方の弥生時代後期後半の人々が用いた吉ヶ谷式土器とされる土器である。

東京湾岸から荒川に沿って北上してきた南関東の人々は、ここ桶川で、西の吉ヶ谷式土器を使う人々と出会い、交流をもっていたことを八幡耕地遺跡から出土した土器は物語っている。



展示資料4 弥生町式土器



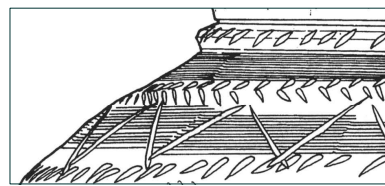
展示資料6 吉ヶ谷式土器

西からもたらされた土器が開く古墳時代

弥生時代から古墳時代へという大きな時代の転換期。桶川の遺跡から発見される土器にも時代の変わり目を示す変化がみられるようになる。土器は、弥生時代の土器の伝統を保ちながら変化していくものと、その様相を一変させるものがあり、一様とはいえない。

荒川に沿う川田谷の台地にある遺跡からは、繊細な櫛描文で飾られた壺が発見されている。この土器は、東海地方西部の伝統をひくものである。

3世紀、近畿地方の勢力を中心として「国」の礎を作ろうとする歴史の波がおこり、東海地方の人びともこの波を受け止め、さらに東方へと伝えていった。土器の交流はそれを使う人々の交流を表し、やがて、ともに古墳を築く時代がやってくる。



丸山遺跡と三ツ木遺跡

弥生時代の末期になると、桶川市西部では、遺跡の数が一気に増えていく。川田谷の台地に刻まれた谷に沿って、小規模な集落遺跡が点在している。三ツ木遺跡と丸山遺跡はこの段階の遺跡である。

丸山遺跡第1次調査では、八幡耕地遺跡に続く南関東の弥生時代後期の壺(展示資料31・32)や台付甕(展示資料28)とともに比企地方の吉ヶ谷式土器の甕形土器(展示資料29)が発見された。第3次調査では、東海地方西部系の高坏(展示資料42)と東海地方西部の影響を受けた小型の壺(展示資料34)が発見されている。

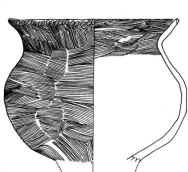
三ツ木遺跡では、南関東の弥生時代後期終末の壺(展示資料33)と、あらたな器形として東海地方西部の影響を受けた高坏(展示資料43)と器台(展示資料41)が伴っている。

ともに、丸山遺跡第3次調査と三ツ木遺跡の土器は弥生時代終末のもので、ともに東海地方西部の影響が見られ、あらたな時代の到来を物語っている。

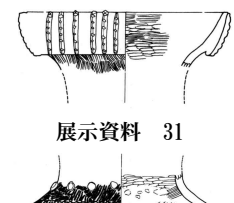
丸山遺跡出土土器



展示資料 29



展示資料 28



展示資料 31

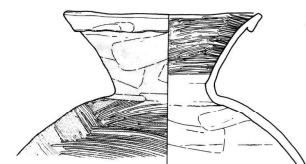
展示資料 32



展示資料 34



展示資料 42



展示資料 33



展示資料 41



展示資料 43

〔第1次発掘調査〕

〔第3次発掘調査〕

三ツ木遺跡出土土器

台原遺跡

昭和59年(1984)の発掘調査においては、弥生時代の後期終末期の住居跡1軒及び古墳時代前期の住居跡7軒が発見されている。隣接する西台遺跡では、昭和43年(1968)に発掘調査が行われ、古墳時代前期の集落と方形周溝墓が確認されている。平成19年(2007)に圏央道の建設に伴い発掘調査が行われた前原遺跡も含め、規模の大きな遺跡群を形成するものと考えられる。

なお、直前の三ツ木遺跡の段階では弥生時代の集落遺跡の多くが断絶する一方、荒川の氾濫原に面した台地上に大遺跡が成立することは、新たな時代の到来を感じさせる。



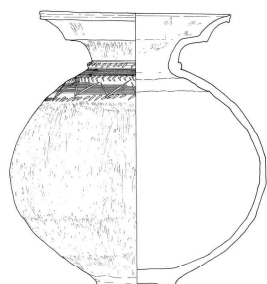
台原遺跡発掘調査 昭和59年

台原遺跡の土器

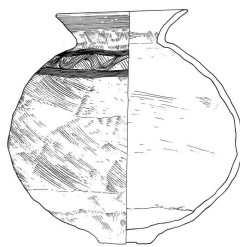
2号住居跡からは、東海地方西部の系譜を引く櫛描文を施した壺形土器が2点発見されている。展示資料47と46は、胴肩部に櫛描文が施されている。4号住居跡出土の装飾器台(展示資料49)は北陸地方に由来し、古墳時代前期前葉にみられる特徴的な器形である。さらに、台付甕(展示資料54)は、東海地方西部の影響を受けている。

多様な系譜をもつ土器が共存するこの時代に、旧入間川の流域では、集落遺跡の規模が拡大し、前方後方墳が築かれるようになり、古墳時代はいよいよ本格的に幕をあける。

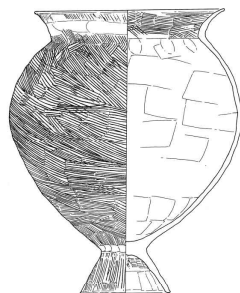
第2号住居跡出土土器



展示資料 47

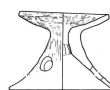


展示資料 46

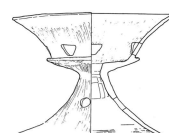


展示資料 54

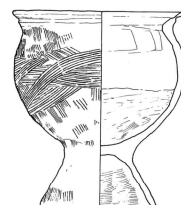
第4号住居跡出土土器



展示資料 50



展示資料 49



展示資料 51

旧入間川水系の遺跡に見る古墳時代の幕開け

現在の荒川の流路は、江戸時代初期に旧入間川水系の和田吉野川に南流する荒川を瀬替えして定まったものである。古代においては、東京湾にそそぐ利根川から分かれた入間川が大宮台地の西を北上し、さらに、入間川、都幾川、越辺川、市野川そして和田吉野川と分かれ、入間、比企地方に流域を広げていた。

川は、人や物が行き交う交通路であった。稲作を行う弥生時代の人々が美しく彩られた壺をもって北上した川の道は、その後3世紀に入ると、西からの国作りの波を伝え、古墳時代の幕開けとなり、流域に熊野神社古墳に先立つ前方後方墳が築かれていく。

下関（しもさと）遺跡と赤台遺跡

ともに鴻巣市大字原馬室に位置するこれらの遺跡は、荒川と和田吉野川の氾濫原を西に望む台地上に立地する。

下関遺跡では、昭和54年（1979）に行われた発掘調査において古墳時代前期の竪穴住居跡から、胴に櫛歯状工具によって華やかな文様が描かれた壺形土器（展示資料55）が発見されている。この文様は、東海地方西部で生まれ、華やかな印象からパレス（宮廷）文様と呼ばれており、これを施した土器が古墳時代の幕開けとともに、関東地方に移入されている。

また、近くの赤台遺跡からも同様の文様を描く高坏（展示資料57）が発見されている。

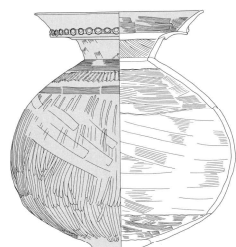


反町（そりまち）遺跡

反町遺跡は、入間川の支流である都幾川のほとりに立地している。平成17～20年に埼玉県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が行われ、弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが明らかとなっている。古墳時代前期においては281軒の住居跡が見つかり、県内最大規模の集落跡と想定されている。

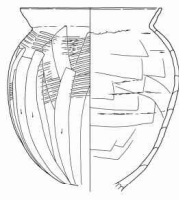
また、反町遺跡の集落には、工房的な性格をもつ遺構があり、水晶や緑色凝灰岩、瑪瑙を素材とする玉製品が製作されていたことを示す遺物や、ガラス製の小玉を作る鋳型も発見されている。

集落を縦断する河川跡や堰の遺構も発見されており、人や物が盛んに往来する古代の「津」ともいえるところであったのだろう。遺跡からは、古墳時代前期の東海地方東部及び西部、さらには近畿、北陸などに由来する土器が多数発見されている。



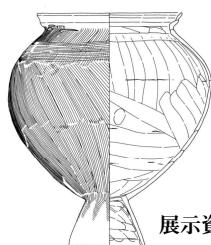
展示資料 60

近畿系



展示資料 61

東海西部系



展示資料 63

東海東部系



展示資料 59

北陸系



展示資料 64

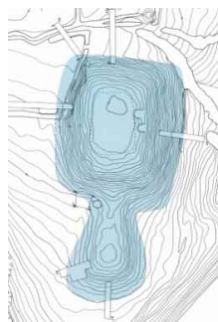
山の根古墳

山の根古墳は、吉見町久米田にあり、吉見丘陵から続く標高30mほどの尾根に立地し、桶川市付近から西に分流する市野川の低地を見下ろす。前方部を南に向ける前方後方墳であり、墳丘の長さは54.8mである。墳丘は、もともとの地盤を削り出して、その上に少ない盛り土で築かれている。

平成2年（1990）に実施された調査で墳丘西側のくびれ部から土器が出土し、甕形土器、鉢形土器や壺形土器とともに大型の高坏形土器（展示資料65）が発見されている。この高坏形土器は、東海地方西部に系譜を引くものとされ、この土器から古墳の築造年代は4世紀前葉と考えられている。

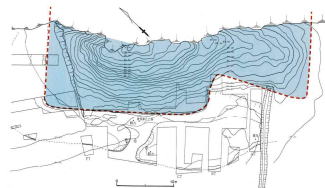


展示資料 65



山の根古墳実測図

諏訪山29号墳



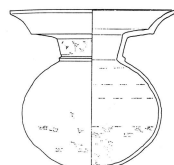
諏訪山29号墳実測図

東松山市の高坂台地北西部、都幾川の流れる低地を望む台地のふちに立地する。昭和59年（1984）に行われた県史編さん室による発掘調査によって前方後方墳であることが明らかになり、墳丘の規模は長さ53m、高さ3.6mで、墳丘の周囲には最大幅約10mの周溝がめぐる。後方部南側から小型器台、小型高坏と壺形土器が出土した。

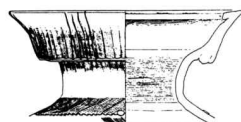
壺形土器には、有段口縁の壺（展示資料69）がある。これは、焼かれる前に底部に孔が穿たれ、古墳に供えることを目的として作られたものであろう。

また、東海地方東部で作られた大廓（おおぐるわ）式土器の大型壺の破片（展示資料70）が目をつく。大廓式土器は、前方後方墳が築かれる関東地方の古墳時代前期の初めに、各地に運ばれている。これらの土器から古墳の年代は4世紀前葉と考えられている。

この古墳の近くには、長さ68mの前方後円墳である高坂諏訪山古墳（諏訪山35号墳）があり、熊野神社古墳と近い築造年代である可能性がある。



展示資料 69



大廓式土器の壺
展示資料 70

前原遺跡

前原遺跡は、桶川市川田谷の北部にあり、西に荒川と市野川が合流する氾濫原を望む台地上に位置する。遺跡は、昭和43年（1968）に発掘調査が行われた西台遺跡に接し、さらに、台原遺跡を含む古墳時代前期の大規模な遺跡群である。

平成19年（2007）に、首都圏中央連絡自動車道の新設工事に先立って発掘調査が行われ、古墳時代前期の遺構としては、竪穴住居跡12軒が発見され、5軒の竪穴式住居跡から水晶、緑色凝灰岩、瑪瑙、滑石等の石材が出土し、玉作工房である可能性が高い住居跡も発見されている。

前原遺跡を含む遺跡群は、弥生時代末期に集落の形成が始まり、住居跡からは台原遺跡にみられるように東海地方東部や西部、北陸地方の土器が発見され、方形周溝墓の墓群を伴う。このような遺跡に、反町遺跡と同様、玉作工房を伴うことは、まさに地域の拠点となる遺跡として理解される。

高坂古墳群と三角縁神獣鏡

高坂古墳群は、東松山市の高坂台地の東縁部から中央部にかけて立地し、反町遺跡が所在する沖積地を東に望む。

平成23年（2011）には、前方後方墳である高坂8号墳の調査によって捩文鏡（ねじもんきょう）、緑色凝灰岩製管玉と水晶製の勾玉などが出土し、さらに、隣接地から、埼玉県では初となる三角縁神獣鏡（展示資料80）が発見された。

旧入間川流域にあるこの地には、多くの前方後方墳が築かれ、反町遺跡にみられるとおり東海地方を始めとする各地との交流を裏付ける多様な土器が発見される。すなわち、三角縁神獣鏡が発見される背景として古墳時代前期に新しい文化を受け入れることができる社会が形作られていたと考えられる。



前原遺跡出土 石材（水晶）



展示資料 80
「三角縁陳氏作四神二獣鏡」（複製）
直径22cm 重さ1049.5g

熊野神社古墳とその前後

熊野神社古墳は、昭和59年の県史編さん室による調査によって古墳の規模や年代を知る手掛かりを得ている。その結果、古墳の直径は38m、墳丘の盛り土は6～6.5m、さらに最大幅16mの周溝がめぐる円墳であり、出土土器から古墳の年代は4世紀後半に位置づけられた。加えて、周辺の遺跡における調査資料の蓄積により、古墳を築いた人びとの社会を俯瞰する研究が可能となってきた。

今回の展示では、旧入間川の流域における弥生時代後期から古墳時代前期の発掘調査をもとに、熊野神社古墳成立の前史を構成してみた。

東国有数の副葬品をもつ熊野神社古墳は、流域の歴史の積み重ねの中で成立していることは疑いない。また、宮前遺跡や殿山遺跡といった隣接する遺跡との関わりも流域の歴史と同様の歩みの中で理解することができる。

宮前遺跡

川田谷地区の南部、桶川市川田谷字宮前に位置し、熊野神社古墳に隣接する集落遺跡である。平成2年（1990）2月の発掘調査において発見された土器は、簡素で薄く、近畿地方の土師器の影響を受けている。

とくに小型丸底埴（展示資料83）と小型器台（展示資料82）は、近畿地方において祭祀に使われたとされ、熊野神社古墳からも出土している。

よって、宮前遺跡は、熊野神社古墳と関わりをもつ人びとの集落だった可能性もある。

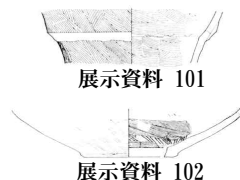
展示資料91の壺形土器は、4世紀前半の諏訪山29号墳からも同型式の土器が発見されている。このことは、旧入間川の流域に古墳文化の幕開けをもたらした歴史の波がここにも及んでいることを示している。

殿山遺跡・殿山古墳

殿山遺跡は、上尾市大字畔吉にあり、熊野神社古墳の南に位置する。殿山古墳は、昭和52年（1977）に周溝の一部が発掘調査され、径32m、高さ2.7m、周溝の最大幅5.2mの円墳であることがわかった。出土した壺形土器（展示資料116）は5世紀前半のもので、熊野神社古墳よりも新しい。

また、遺跡内には、4基の方形周溝墓が発見されている。これらの方形周溝墓は、いずれも古墳時代前期のものであり、殿山古墳よりも先に築かれ、4世紀後半の熊野神社古墳に並行する年代にあたる。

このことは、方形周溝墓に葬られていたこの地の首長が、熊野神社古墳を引き継いで古墳を築いたという歴史の推移を物語っている。



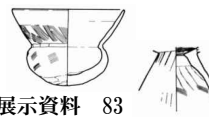
熊野神社古墳実測図
『埼玉県古式古墳調査報告書』より



展示資料 81



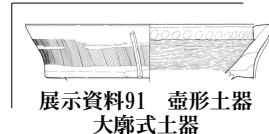
展示資料 89



展示資料 83



展示資料 82



展示資料91 壺形土器
大廓式土器



展示資料 80
4号方形周溝墓出土



展示資料 116
殿山古墳出土